

鷗友学園女子中学校

二〇二二年度

一次入学試験問題

【国語】

時間 50 分

【校長先生からのメッセージ】

いよいよ入試が始まります。今日までよくがんばってきましたね。
今までコツコツと勉強してきた自分を信じ、最後までがんばってください。
皆さんの持っている力が十分に発揮されることを願っています。
ゆっくりと深呼吸をし、心を静め、開始時刻を待ちましょう。

【注意】

1. 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
2. 問題は全部で十三ページあります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、監督かんとくの先生を手をあげてよんでください。
3. 問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

江戸時代前期、藩主の前田利治は、藩の財政を立て直そうと九谷金山を開き、罪をおかした流刑人たちに金の採掘を行わせていたが、思うように金が採れなかった。そこで利治は、藩の銀吹座役（金・銀・銅を用いて刀のつかなどを作る細工師）・後藤定次に新たにやきものづくりを興すよう命じた。重要な任務を帯びた定次は都から呼び寄せた陶工の田村権左衛門を連れ、十一歳の息子の忠清とともに九谷金山へと旅立った。九谷金山で、やきものづくりに必要な陶石（陶磁器の原料になる粘土）を探す生活も二年目に入った。

千束滝のそばでは、かけつけた役人の倉知弥八郎が、あたりの者をさしずしていた。

定次は、腰を強く打っていた。さすがに、青白い顔で、戸板に乘せられていた。打ち身の痛さをこらえようとして、顔がひきつるようにながんでいた。それでも落ちたところが滝つぼの横の笹原であつたために、ふしぎと大きなけがはしなかったらしい。かれは、けさから、この滝のあたりの土や石をしらべていたが、滝に沿ったがけを登って上を調べてみたくなつた。そこで、滝の横にはい上がっている藤づるを伝つて登つたのである。同じ一番組の六助や熊吉らをともなつて登つた。別に呼んだわけではないのに、あの大橋右門も、山師の治助もいっしよであつた。

（やつら、なんのために――。）

いっしゅん定次は疑わしく思つたが、それっきりかまわずに登つていった。

滝の上は、せまいながらも平地になつていて、雑木が生い茂つていた。そのあたりを、掘り子たちに掘らせたところ、今まで、滝の下で掘つていた石と少しはだざわりの違う石が発見された。

定次は、これは、あるいは陶石かもしれないと思つた。

さつそくあたり一帯の木を切り倒して掘らせた。いくつかの石を掘り出したところで、それを滝の横のがけから、もっこでつりおろさせた。

定次は気がせいた。早く小屋に帰つて、権左衛門と、もう一度、よく石を調べてみたかつた。石をおろすとすぐに、自分も藤づるを伝つておりようとした。

ちょうど滝の中ほどまでおりてきたときである。とつぜん藤づるが切れて、かれのからだは、下の笹原に沈むように落ちてしまつたのである。

そのとき、がけの上から、^①右門と山師の治助がのぞいていたのを定次は知らない。

治助が、

「ふん、やきものより金じゃ。」

と、つぶやいた声も聞いていない。

定次がにぎつていた藤づるの先は、刀でぶつ切り切られていたが、かれは、それもまた知らなかつた。

がけの上の右門はなぜか、そのときも自分の手のひらを見ていた。

忠清は、戸板を囲む流刑人たちの間から、かきわけて前に出た。じつと父の顔を見ていた。

うつすらと目をあいた定次は、忠清を見て、ほつと息をついていた。

「忠清、とうとう見つけたぞ、滝の上に陶石があつた。あれは陶石に違いない。」

「父上、でも、どうして藤づるが切れたのです。」

忠清は、そのことのほうが気になつた。

「――。」

定次は何もいわなかつた。わかつているのか、わかつていないのか、悲しげな目をして空を見ていた。忠清はぐるりとあたりを見まわした。父と子を取り囲む流刑人たちの目は、無表情であつた。横をむいている者、空を仰いでいる者、背をむけてあらぬほうを見ながら、ゆうべのばくちの話をする者などさまざまであるが、定次を見ている者はなかつた。忠清の相棒をしている新助さえも、その肉のうすい顔にのびたひげを無表情になでながら、滝のほうを見ていた。忠清に急を知らせてくれた仙三は、ずんぐりしたからだを笹原の中へどっかりと沈めるように腰をおろしていた。

（どうして藤づるが切れたのだ――。）

^② 忠清は、自分たち親子が、この九谷では、まだ孤独であることを知つた。忠清は早く、おとなになりたいと思つた。倉知弥八郎のさしずで、流刑人たちが、戸板を持ち上げ、静かに運び出した。

ゆるゆると歩く戸板の列に、いつのまに、どうしておりてきたのか右門と治助が加わっていた。

「父上、痛みませぬか——、ほんとに、どうして藤づるが切れたのでしょうか。」

父に添って歩きながら、忠清は、しきりにつぶやいた。

定次がけがをしたその日から、山に妙なうわさが流れた。

「陶石が出ると、ここでやきものをするようになる。そうすると、流刑人は刑期が終っても家へ帰れなくなるのだ。」
というのである。

定次が、滝の上で見つけた石が、陶石かもしれないと流刑人たちも思っていた。が、いまとなつては、だれひとり、そのことを口にする者はいなかった。山師の治助が、

「この金山に陶石の出るはずがねえがい。」

と、うそぶいて歩くので、だれもそれにさからおうとはしなかった。山では、山師のいうことは絶対であった。右門はこの治助をたくみにあやつっていた。右門にとって、流刑人とはくちに明けくれする山の生活は気楽であった。が、かれが陶石がしをきらったのはそれだけではなかった。

七尾の主家前田利政家に取りつぶされ、浪人として、暮らさねばならなくなったとき、右門は迷った。

一刀流免許の腕を生かして、剣の指南役として、新しい仕官を見つけるか、それとも、妻のさとがすすめるように、藩士時代に好きで習った絵の道で暮らしを立てるか、二つに一つの道を、かれは迷った。そのあげく、さとのすめを聞き入れず、剣の道を選んだのである。ところが、すでに治まった世になって、剣の腕を高く買おうとする藩主は、もういなかった。右門が仕官したいと願う大名は、剣の腕より、何の技術を持っているか、それを聞いた。右門は、それでも絵の道で生きようとは思わなかった。各地を流れ歩いているうちに、とうとう妻のさとが死に、かれはひとりになった。そのとき、右門は絵師にならなかったことを悔いた。

かれは、手のひらを見るたびに絵筆をにぎったことのある藩士時代を思い出した。そのときにならず妻のさとが頭に浮かんでくるのである。それでもかれは絵師になろうとはしなかった。

ひとりになってからのかれは、もう剣の道を歩くというより、刀にすがって歩く道に落ちていた。用心棒として、転々と生きる道を求め、技術を持ったものを憎むようになった。

そして、技術を持つ銀吹座役の定次が憎かった。

「今さらやきものなどといって、山の生活をかえられてはたまらぬ。」

右門は、治助にいにくるめた。

「定次の見つけた石はやきものにならぬといい張るのじゃ、よいか。」

と、念を押していった。

十日ばかりたった。

「後藤様、腰のぐあいは、どうでござりますか。」

権左衛門が、小屋へ戻ってきた。

「うむ、打ちどころがよかったのか、もう立ち上がれる。ほら、歩いて見せましょうか。」

「いや、ま、休んでいてくださいませ。ところで、お奉行様が、もし歩けるようだと、ちよつと詰所まで来てもらえぬかと申されておりますが、どうなされます。」

「石のことじゃな。」

定次は、それを待っていたようであった。

山は昼間でも静かである。さわがしいのは村の中を流れる大聖寺川の水音だけだ。

村の家々の軒には、もう柿がなるされている。川原の石が白くかわいて見える。

（ここへ来たのは、おとしの春だったか——）

定次は、この二年余りが、長過ぎたように思えた。こんど見つけた石がもしほんとうに陶石ならば、いまここで最初のひと区切りが、つけられるような、はずんだ気持であった。

ところが、権左衛門をともなつて詰所へ一步はいったとたん、定次は、はつとした。

右門と治助が、清左衛門の前に端座(注4)していたのである。

(こやつら——。)

定次は顔をこわばらせた。

権左衛門の顔に、心配の色が見えた。

せまい詰所の空気が、ぴいんと張りつめた。^③ 清左衛門を正面に、むかい合つてすわった男たちの顔が、ぴりつと引きしまつた。

清左衛門は、そういう空気を、まるでかまわないかのように、にこやかに口を開いた。

「後藤殿、先日の腰の痛みはどうじゃ。」

「は、おかげ様で、こうして歩いてこれるようになりました。」

「ふむ、それはなにより。ところで、先日滝の上で掘り出したという石のことじゃが……。」

「は、それにつきまして、ここにいる権左衛門殿に調べてもらいましたが、ねばりといいつぶといい、じゅうぶんやきものになるかと存じます。」

「ほう、それありがたい。」

「お奉行様——。」

権左衛門が説明を始めた。

「先日から、その石をくだいて、水ひいたしております。水ひと申しますのは、石をくだいて、ふるいにかけて、こし桶(けづ)の中で沈ませ、底に、土や石の粉をためることでござります。」

「ほほう、水ひというか。」

「はい、こうしてできた原料を坏土(はいど)というております。さつそくその坏土で、大皿を一枚ひねってみましたが、ねばりけなさは、ちょうどええのではないかと思つておるのでござります。」

「ふむふむ、すると治助。」

清左衛門は、治助のほうを見た。治助は、赤いはなの先を右手でつるりとなでると、清左衛門のほうをむいた。
「とてもやきものになる石ではないと、先ほどいつていたが、何か根拠はあるか。」

「はい、大体金山でとれる石は紅石(べにせき)と申しまして、明国(みんこく)などでは、やきものの色つけえのぐとして使うと聞いております。やきものの原料にはならぬとのことでございます。それに第一、権左衛門殿が成形された皿は、まだ火を通しておりません。ねばりけだけではやきものになるかどうか、疑わしう存じます。」

そういう治助に右門が続けていった。

「奉行殿、後藤殿も、権左衛門殿も、山歩きは今回が初めて、そこへきますと、この治助は山歩きを業(ぎよう)としております。土や石を見る目におのずから違いがあるのではございせんか。」

定次は、むつとしてことばを荒(あら)げた。

「右門殿、あなたは、元、七尾の浪人、なおのこと石のことに口をはさんでもらいたくない。この石は、すでに成形いたしてみて、やきものになるかどうか、見通しをたてているのでござる。だまつておられよ。」

「むつ、だまつておれと申されるのですか。いかにもせつ者は浪人、後藤殿に意見を申す筋ではござらんが、だまつておれとはだいまのおことば、ぶじよくと受けたまわる。」

それでも、定次は、きつと右門をにらみつけていた。定次の全身に、絶対に後へひかぬという気迫(けはく)がみなぎっていた。

そのとき、

「治助殿。」

権左衛門がおだやかに口を開いた。

「いつだったか、あなた様は、以前に仕事をしておられた火山地方には、長石をふくんだ石が多かったというておられましたな。」

「うむ、わしがこの目でたしかに見てきたんじやわい。」

治助は、あごをしゃくつていったものの、その目に警戒(かいけい)の色があつた。権左衛門が次にいおうとすることを探(さぐ)っていた。

「古来やきものには、その長石や、石英などの風化したねばりのある石がよいとされているのでござります。」

「もちろん知っておるわい。」

「ということになりますと、火山地方に陶石が出る見込みは多いものと考えられます。」

「——」。

「そこでござりますな。この九谷は、火山脈の中にある谷でござります。陶石が出て不思議はござりません。」

「なにつ、火山の谷。」

「はい。白山という雄大な火山を頂点とする火山脈の中に、この九谷は、あるのでござりますぞ。山中、山代の湯の里を
ごらんなされ、火山のすそでうて、なんで湯がわきますやろ。」

治助のまゆがぴりりと動いた。目がひざに落ちた。口をもぐもぐさせたが、ことばにはならなかった。権左衛門の落ち
着いた話が続く。

「わたしは、九谷には、かならずやきものの石が出ることを信じておりました。そして、この石が、その一つであること
にも、自信が持ててきたのでござります。これは、どんなにしても、いっぺん焼いて確かめたいと思うております。とにか
く、百の議論より、石を火にあわせること、それがやきものの初めでござりませんやろか。」

おだやかな口調であるが、かれのひとことひとことには、むだがなかった。まちがいがなかった。

「むっ。」

④ 治助は、にがい顔をするだけで、何もいえなかった。

右門は、つと立ち上がると外へ出た。

かれが去っていくぞうりの音が、ひたひたと遠ざかっていく。その後を追うように治助が出ていった。⑤ 右門は歩きながら、

手のひらを見ていた。

詰所には、しらじらしい空気が残った。

清左衛門が定次を見た。

「よしっ、後藤殿、田村殿、その石をいったん殿にお見せしてもらいたい。近日中に山をおりられよ。」

「はっ。」

「はっ。」

清左衛門の顔に、やっと、もとのおだやかなほえみが浮かんだ。

詰所を出ると、定次は権左衛門の横顔をあらためて見た。小柄で、顔まで小づくりなこの老人の目は細い。口もとも小さい。

そして、いつも何か思いにふけて、ただ土を見、石を調べているだけである。もう六十を過ぎていようか。京都で名高い陶工、
竹原五郎七の弟子だったという。この人は骨の中まで、ほんとうの陶工なのかもしれないと、定次は思った。

もう少しで、右門とはげしく争ったかもしれない自分は、まだまだこの権左衛門にはおよばないと思った。

(小納弘『五色の九谷』)

(注1) 山師……鉱脈を探して、鉱山の発掘を行う人。

(注2) 指南役……指導者。

(注3) お奉行様……九谷金山で働く人々を監督する金山奉行。土田清左衛門のこと。

(注4) 端座……姿勢を正してすわること。正座。

問一 —— 線部①「右門と山師の治助」は、この場面でのどのようなことをしたと考えられますか。答えなさい。

問二 —— 線部②「忠清は、自分たち親子が、この九谷では、まだ孤独であることを知った。忠清は早く、おとなになりたいと
思った」とありますが、なぜそのように思ったのですか。孤独であると感じた理由を明らかにして説明しなさい。

問三 —— 線部③「清左衛門を正面に、むかい合ってすわった男たちの顔が、ぴりりと引きしまった」とありますが、この時の
「右門と治助」と「定次」は、それぞれどのような意図を持っていますか。説明しなさい。

問四 —— 線部④「治助は、にがい顔をするだけで、何もいえなかった」とありますが、治助が何もいえなくなったのは、権左
衛門がどのように筋道立てて説明したからですか。※部「そのとき」『むっ。』における権左衛門の話の要点を明らか
にして説明しなさい。

問五 —— 線部⑤「右門は歩きながら、手のひらを見ていた」とありますが、この時、右門は自分の人生に対して、どのような
思いをいだいていますか。定次への思いもふくめて説明しなさい。

日本の川の魚群集を調べてみると、多くの川にアユが生息しています。しかも、その多くは、琵琶湖産のアユです。湖に棲んでいるアユはワカサギと同様にミジンコを好んで食べますが、川にいるアユは、石の上に繁茂する附着藻類を主な餌としています。そうなる、川に放流されたアユも、川の生態系をかく乱しているといえるでしょう。

すると、日本全国の多くの川や湖の魚群集は、主に漁業関係者によって人為的に変えられ、それに伴って生態系も変えられてきたといえます。そう考えると、漁業関係者の行為は、ブラックバスを放流した人の行為と同じといえます。しかしながら、両者の間には大きな違いがあります。それは、ブラックバスの放流は秘密裏に行われたのに対し、ワカサギやアユは漁業権を得た漁業者によって、公然と放流されてきたという事です。すなわち、多くの人がそれを認めてきたのです。

ここで私は考えました。生態系をかく乱するという事では、ワカサギやアユはブラックバスと同じなのに、^①なぜ、ワカサギやアユの放流は、ブラックバスの放流と異なり、問題にされないのでしょうか。恐らくそれは、ワカサギとアユの食性がブラックバスと異なっているからでしょう。

生物多様性に関心を持たれるようになった今、陸上の生物群集はもとより、湖や川に棲む生物群集の多様性の話もよく耳にするようになりました。そして、そのとき話題に上る生物のほとんどは、メダカ、カダヤシ、ブルーギル、ブラックバスなどの魚です。まるで、多くの人たちは、水域に棲む動物は魚だけと考えているようにすら思えてきます。すなわち、その人たちは、魚にしか関心がないのでしょうか。特にブラックバスが水域に入ってくると、「生態系が壊れる」という声が大きくなるのは、ブラックバスが魚を餌とするからではないでしょうか。言い換えれば、多くの人たちが、ワカサギやアユが餌とするミジンコや水生昆虫、附着藻類などを軽視していることを示しているように思われます。すると、その人たちは、生物種を差別しているといえるでしょう。これはおかしいことです。なぜなら、彼らが軽視している生物が、食物連鎖を介して、彼らが重視している魚の命を支えているからです。また、それらの生物は水質にも大きな影響を与えているのです。そのように、水域の生態系で、極めて重要な役割を果たしている生物を軽視しているということは、多くの人が生態系を理解していないことの現れではないでしょうか。

ところで、今の日本人は、ブラックバスよりもワカサギをひいきしていますが、ワカサギがブラックバスのように害魚扱いされたことがあります。例えば、一九一四〜一九一五年に諏訪湖にワカサギが導入されてから、しばらくたった一九三二年、魚類学者の田中茂穂氏が、「諏訪湖のワカサギが、それまで漁業で重要な生物であった小エビをほとんど絶滅させた」と東京日々新聞に書いています（『ブラックバス移殖史』つり人ノベルズ）。ところが、その後、ワカサギが諏訪湖での漁業活動の中で大きな収入源になると、一転して、ワカサギが、大切な魚に変わったのです。ある湖では同様のことがブラックバスに対して生じました。その湖にブラックバスが侵入した当初は、「ワカサギが食べられてしまう」として密放流を非難した漁業関係者が、その湖に訪れるバスの釣り人が増えて、遊漁料収入が増えるという態度を変え、ブラックバスを漁業権魚種にし、その後は漁業者自身が積極的にバスを放流したのです。

また、昔から日本の河川には、海で育ったアユの稚魚（いわゆる天然アユ）が多く遡上してきて、漁業者や釣り人を喜ばせてきました。それが一九八〇〜一九九〇年頃になると遡上するアユの数が大きく減少し、琵琶湖産のアユが大量に放流されるようになりしました。天然アユの減少は河川改修工事や水質の悪化といわれています。

ところが、近頃は状況が変わり、天然アユの遡上が増えているようです。それには、川の物理的環境（護岸形態、魚道の有無など）や化学的環境（水質）が、アユが棲みやすいものに変わったことが影響しているのかもしれませんが。川によっては大量に天然アユが上るようになり、その数が一〇〇万匹にも達したところがあるようです。そのためか、他の多くの川でも、^②「一〇〇万匹の天然アユを呼び戻す」ことを目標として、さまざまな取り組みが行われるようになってきました。私はこれに対して違和感を覚えました。

まず、川といっても、それぞれが大きく異なります。流程が長い川、短い川。水量の多い川、少ない川。水温の高い川、低い川。生物生産量の高い川（水中の窒素やリンの濃度が高く、アユの餌になる附着藻類が多い川）、その生産量が低い川。これらの条件が異なると、その川で生息できるアユの数は大きく異なるはずです。アユが多くは棲めない川に、一〇〇万匹を目指して海から上がってくるアユを誘い込むことをしたら、多くのアユが川の中で死ぬことになるでしょう。そうすると、死んだアユの腐敗によってその川が汚濁するかもしれません。また、多すぎるアユによって、川の中の附着藻類が大量に食べられてしまうと、アユと同様に附着藻類を主要な餌とする水生昆虫に、大きな影響が及ぶに違いありません。すると、それは大きな生態系かく乱

ということが出来るでしょう。

川に上ったアユは、その生態系のメンバーとして暮らすことになります。すると、生態系を構成する全ての生物と直接または間接的に関わりを持つことになります。そのため、ある河川生態系の中のアユの個体数が大きく変化したなら（人間が川に棲むアユの個体数を大きく変化させたら）、それは間違いなくその生態系に影響を与えるのです。しかも、その影響が及ぶ範囲は川の中だけではありません。川に棲んでいる水生昆虫の多くは幼虫で、成虫になると羽を持って川から飛び出します。すると、その成虫は、河畔林等で暮らしている鳥の格好の餌となるのです。次に水生昆虫を食べた鳥が、林の中で糞をすると、その糞は土壌中の微生物によって分解され、樹木の栄養になります。すると、川の生態系の一員である水生昆虫の体をつくっていた物質は、それにより陸上生態系に組み込まれて行くのです。したがって、川の生物を人為的に増やす、あるいは減らすことの影響は、陸上の生態系にも複雑な影響を与える可能性があるのです。

多くの川で「アユ一〇〇万匹を呼び戻そう」というかけ声をあげている人たちの多くは、生態系を考慮せず、アユのことしか考えていない人たちではないでしょうか。

③ このように、魚と人の関係を見ると、人々がかなり主観的に生物種や生態系を見ていることがわかってきます。

ただし、ここで断っておきますが、私はワカサギやアユが湖や川の生態系を大きく変えるからといって、それらの魚の放流はするべきではないと主張するつもりはありません。なぜなら、その湖や川を利用して多くの人々が、それらの魚の放流を容認しているからです。ただし、その容認は、人々がワカサギやアユの生態系への影響を知らなかったために与えられたのかもしれませんが。もしそうであるなら、みんなが同意して、よいこととして行ったワカサギやアユの放流が、思わぬ環境問題を起こす可能性があります。そのことに注意が必要でしょう。

（花里孝幸『生態系は誰のため？』）

（注）遡上……川の流れを上流へさかのぼっていくこと。

問一——線部①「なぜ、ワカサギやアユの放流は、ブラックバスの放流と異なり、問題にされないのでしょうか」とありますが、筆者が考える「ワカサギやアユの放流」が問題にされない理由を説明しなさい。

問二——線部②「私はこれに対して違和感を覚えました」とありますが、「違和感を覚え」たのはなぜですか。「これ」を明らかにした上で、百字以内で説明しなさい。

問三——線部③「魚と人との関係を見ると、人々がかなり主観的に生物種や生態系を見ていることがわかってきます」とありますが、ワカサギやアユの放流を行う漁業関係者は、生物種や生態系に対してどのような主観的な考え方を持っていますか。五十字以内で説明しなさい。

三

次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 自分ホンイの考え方。
- (2) 二国間でメイヤクが結ばれた。
- (3) 約束のコクゲンに間に合った。
- (4) ユウバエの空。
- (5) シキユウの呼び出しがあった。

このらんには
何も書かないこと

問三		問二		問一		問五		問四		問三		問二		問一	
(1)															
(2)															
(3)															
(4)															
(5)															

⑨

⑧

⑦

⑥

⑤

④

③

②

①

何も書かない